

自然災害とダークツーリズム

Natural Disasters and Dark Tourism

井出 明¹
Akira IDE¹

¹ 追手門学院大学 経営学部
Department of Management, Otomon Gakuin University

The concept of “dark tourism” is becoming popular nowadays. According to this concept, tourism is not for the purpose of only leisure but also to experience the grief or share the grief of people who have been impacted by death and tragedy. Japan has experienced a number of natural disasters such as earthquakes, volcano eruptions, and so on. Therefore, Japan can contribute toward developing this new type of tourism in academic research. In this paper, this new concept of tourism will be discussed, especially keeping in mind Japanese natural disasters.

Keywords : dark tourism, natural disaster, Japan

1. はじめに

近年、ヨーロッパで“ダークツーリズム”なる新しい観光の概念が提唱されている。これは観光を単に“楽しさ”や“レジャー”といった観点から捉えるのではなく、「人類の悲しみを学ぶ」という新しい側面から観光を捉え直そうとする動きである。

しかし、この分野の草分けとも言える、Lennon&Folly (2001)においても扱われている対象は、戦争や内乱、そしてホロコースト等であって、自然災害についてはほとんど言及されていない¹⁾。これは、ヨーロッパに自然災害がそれほど多く発生しないが故の現象であると思われるが、自然災害で失われる命も、戦争や内乱などで失われる命と同様に痛ましく感じるはずである。また、我々日本は、これまで地震・津波・台風そして火山災害などの自然災害を多く経験しており、こうした自然災害からダークツーリズムの概念を再構築した時、新しい議論の展開が期待されるであろう。

そこで本稿では、これまであまり顧みられて来なかったダークツーリズムと自然災害の関係を軸に、ダークツーリズムを通じた“学び”について、日本の特殊性を鑑みつつ考察を深めてみたい。

2. “学び”の内実

ダークツーリズムに関し、自然災害の観点からその内実を捉え直した場合、どのような“学び”や“気づき”が得られるであろうか。本章では、“日本型ダークツーリズム”の可能性を踏まえ、その具体的な内実に迫ることとする。

(1) 悲しみの共有

自然災害を素材とした旅を通じて学べる成果の一つは、“悲しみの共有”である。成人である我々は人の死を悲しむと同時に、悲しみを抱える人へのいたわりを持つものである。但しこの“悲しみの共有”は、自然発生的に生じるわけではなく、文化的経験によって後天的に習得されるはずである。例えば 2005 年度の青山学院高校の入

試問題において、ひめゆりの塔を訪問した中学生が「退屈そうに体験者の話を聞いていた」と記述されたくだりがあり、この部分が青山学院に対する非難を高め、学院関係者が沖縄を訪れて謝罪するという事件があった²⁾。この事例に対して、事前学習が不足していたと批判することは簡単ではあるが、肉親や友人の死にもあまり遭遇していない若年層にとっては、戦争に関連した死を考えることは、戦争そのものへの無理解と死への無理解という二重の困難さを伴う。では中学生などの若い世代に対して、死という悲しみを共有させるにはどうすれば良いのであろうか。

この“悲しみの共有”へのとりかかりとして、自然災害について学ぶことは大きな意味がある。この度の東日本大震災では、小中学生の若いたくさん命が失われている。また、親や友達を始めとする大切な人々を失った若年者も非常に多い。こうした状況はテレビでも報道されており、放送に触れた若者たちは、リアルな実感として悲しみを感じられるようになるであろう。そしてさらに、ダークツーリズムを通じて同世代の被災者と実際に触れ合うことで、その悲しみは更に確かな感情として訪れた若者たちの心に刻まれることとなる。これはまさに、悲しみが“共有”されたことに他ならない。

こうした、今ここにある悲しみをリアルに感じ取ることが出来れば、地理や政治・経済の知識をつけることによって、外国の戦乱などで命を落とす人を悼むことが出来るようになるし、歴史を学ぶことで 60 年前の戦争で亡くなった人への思いを馳せることもまた可能になるであろう。自然災害に関連したダークツーリズムは、こうした若い世代に死の意味をリアルに考えさせることに加え、具体的な死への悼みを抽象的な死への悼みへと昇華させるためのスタートポイントになるのである。

(2) 日本人の自然観の理解

冒頭で述べたとおり、欧米のダークツーリズムは、戦争やジェノサイド（大量殺戮）を対象としたものが多く、自然災害に関連した事例は少ない。自然災害の観点から

日本のダークツーリズムを考える場合、日本に四季があり、花鳥風月といった豊かな自然とのふれあいがあることに言及する必要がある。

欧米の科学哲学は、フランス・ベーコンの時代から基本的に路線は変わっておらず、自然科学の圧倒的な力を持って自然環境をコントロールすることが科学の核心部分であるとされた。ところが、日本においては、非常に長期にわたって自然と調和して生きることの重要性が説かれてきたため、ベーコン型の価値観とは基本的に相容れない。欧米の外国人にとってこの考え方の相違は、理念的には理解できるものの、実感を伴って納得することは難しいかもしれない。この理念的な理解に確かな実感を与えるために、やはりダークツーリズムの手法は非常に有効である。

この理解を育むための好例として、洞爺湖町立火山科学館の展示が啓発的である。洞爺湖の近くに立地する有珠山は、古来より度重なる噴火活動を繰り返しているが、地元の人達にとっては、この火山があるからこそ豊かな温泉が湧き出ているという理解がある。こうした自然の脅威と恵みの享受をテーマにした博物館は興味深く、欧米からの来訪者にとっては従来の自然観が大きく変わる事が予測される。

(3) 日本人の悼みの特殊性

海外からの来訪者が自然災害に関連したダークツーリズムの対象地を訪れた時、彼らにとって何が新しい知見となるであろうか。人の死を悼むという行為は、文化的背景を無視して語ることはできない。例えば、東南アジアの華僑の葬儀は、日本人にとっては大変賑やかで奇異に映るかもしれない。しかし、彼らにとってそれは紛れも無い“悼み”であり、真剣な営みにほかならない。また、2001年に生じたいわゆる“えひめ丸事件”では、アメリカ側としては異例とも思える真摯な対応を採ったとされているが、日本人の間では謝り方が不十分であるという世論が強く、その後の補償交渉は難航した¹⁾。こうした死に関連したコミュニケーションギャップは、他文化圏の「悼みの構造」への無理解から生じている。

外国人観光客が自然災害に関連した観光ポイントを訪れた場合、彼らはそこで日本人がどのように犠牲者に接してきたかを知るであろう。例えば、東日本大震災において、鉄骨だけの姿になってしまった南三陸町の防災対策庁舎は世界的にも報道された施設である。それ故、この地を訪れる外国人はかなりの多くは静かに手をあわせている。先述の通り、世界には様々な慰霊の形態があるが、異邦人が我が国の悼みの現場に遭遇した時、そこから得られた学習効果は、今後、慰霊や追悼といったつらい状況において、日本人にどう接すればよいかという点に関する有益な示唆を与えることとなる。

また、東日本大震災では、あまりに犠牲者が多かったために火葬が間に合わず、遺体を一時的に土葬にしたものの、今日の葬送の習慣から再び土中から出し、茶毘に付したことが報告されている³⁾。仮にこうした遺体の処置手法が博物館等での展示につながっていけば、そこを訪れた外国人は現代の日本人の遺体へのこだわりを知り、えひめ丸事件で生じた種類の文化ギャップは減ることが期待されよう。

(4) 未来志向のダークツーリズム

もう一点、日本のダークツーリズムが欧米とは異なる啓発性を有していることにも触れておきたい。

欧米のダークツーリズムは、何度か述べたように虐殺や戦争といったいわば“人災”を直接の対象としている。本稿で取り上げている自然災害を中心としたダークツーリズムと比較した場合、観光者の視線の方向が逆向きとなっている。詳述すれば、欧米型ダークツーリズムは、「人類の過去の過ちを正した上で、未来へつなげる」という啓発構造をとるが故に、必然的に過去への反省に力点が置かれた観光内容となる。ところが、地震などの自然災害の場合、人災という言葉で表される場面は少ないため、ダークツーリズムによる観光体験の核心部分は、自然の脅威や人々の悲しみを学ぶことに加え、復興が強く意識されたものになる。

例えば、地震と関連付けられた学習施設としては、神戸の“人と防災未来センター”が知られており、年間50万人を超える来訪者を数えている。こちらは、まさに街の復興過程や地震に際しての人間の生き様が展示対象となっており、地震を自然災害と言うよりもむしろ社会現象として捉えている。こうした未来志向型のダークツーリズムは、日本の自然災害から演繹的に導かれる観光形態であるため、欧米に対して大きな訴求力を有する。

3. 結びにかえて

以上、日本における自然災害を素材としてダークツーリズムを組み立てた際の学びの成果やポイントについて述べてみた。日本では未だ一般化していないダークツーリズムの概念であるが、上述の通り日本人にとっての素朴な価値観とある種の親和性を持つとも言えるし、日本であるからこそ発信できる新たな啓発もある。今後、この分野におけるツーリズム研究が発展することを願っている。

(注)

(1) 宇和島水産高校の生徒が乗った実習船に米軍の潜水艦が衝突し、教師および生徒9名が死亡した事件。アメリカ側は、沈没した実習船の引き上げなどの便宜を図ったが、日本の世論は「アメリカの誠意が足りない」などと言った論調が強かった⁴⁾。

参考文献

- 1) Lennon, J., & Malcolm Foley, M. (2001). Dark tourism—the attraction of death and disaster. Hampshire : CENGAGE Learning
- 2) 朝日新聞 2005年06月14日朝刊社会面 34p
- 3) 吉田典史「せめて遺族の“最期の別れ”は気持ちよく——。極限状態で遺体保護を続けたエンバーマーの素顔——日本遺体衛生保全協会 加藤裕二・事務局長、馬場泰見・スーパースーパーバイザーのケース」『3.11の「喪失」～語られなかった悲劇の教訓』DIAMONDOnline, <http://diamond.jp/articles/-/16916> 2012.5.6.確認
- 4) 朝日新聞 2001年03月01日朝刊総合面 2p

謝辞 本稿の基礎研究の一部は、科学研究費基盤研究(C)「情報爆発時代の観光情報額」によって賄われている。

(2012.5.7.投稿)